2021 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	**日本語を母語とする幼児の格助詞「が」と「を」の理解と使用**
キーワード	①日本語母語話者幼児、②日本語の格助詞、③幼児の日本語の言語発達

研究者の所属・氏名等

フリがナ 氏　名	トヨムラ　カナミ 豊村　かなみ
配付時の所属先・職位等 （令和３年４月１日現在）	白百合女子大学　人間総合学部　助教
現在の所属先・職位等 （令和４年７月１日現在）	白百合女子大学　人間総合学部　助教
プロフィール	白百合女子大学大学院文学研究科博士課程満期退学。2020 年より白百合女子大学人間総合学部発達心理学科の助教とし勤務し、教育と研究のほか、臨床心理士・公認心理師として、幼児・児童を中心とした臨床実践を行っている。

1. 研究の概要

本研究では、幼児の格助詞の理解と使用に関して、初出という格助詞を使用した文の表出が不安定な時期ではなく、格助詞を手がかりとした文理解ができる時期と合わせて、幼児が場面や状況に合わせて適切に格助詞を表出できるようになる時期に関する知見を示すため、課題を作成し調査を行った。本研究の課題を用いて、格助詞「が」と「を」を用いた SVO 構文において、格助詞を用いた文の理解と、文の表出の特徴について検討した。主語が有生名詞、目的語が無生名詞の SVO 構文の場合(ex.「女の子が頭を洗う」)は、主語と目的語が入れ替わると意味が通じず、格助詞が理解できなくても文理解が容易である。しかしながら、主語と目的語のどちらも有生名詞 SVO 構文の場合には(ex.「男の子が女の子を押す」)、格助詞を手がかりとした文理解が必要であるといえる。本研究において、幼児の格助詞「が」と「を」を手がかりとした SVO 構文を理解する時期を明らかにし、SVO 構文の理解と表出の関係について考察するため、すでに収集したデータを用いて分析を進めた。

2. 研究の動機、目的

（1）研究の動機

幼児の格助詞の理解については、これまで多く研究がなされてきているが、幼児の格助詞を使用した文の表出の際に、格助詞をどのように使用するかという点に関する研究は少ない。また、格助詞に関する先行研究においては、語順による理解という文の認知的な側面と、格助詞による理解という統語処理の側面の発達について、段階的な変容として格助詞の理解を捉えているものが多くみられる。しかしながら、文の理解において、認知処理の側面と統語処理の側面は、段階的に変容していくものではなく、文によって異なる処理を使い分けている可能性について検討されておらず、研究課題であると考える。そこで、本研究において、格助詞「が」と「を」を手がかりとした SVO 構文の理解の特徴を捉えるため、課題を作成し幼児の格助詞の理解と使用の発達的変化について新たな知見を示すことが本研究の動機である。

（2）本研究の目的

本研究は、格助詞の理解のデータのみに依拠せず、格助詞を使用した文の表出についての課題を実施し、データの蓄積を行い、格助詞の使用と理解の両方について検討するための基礎的

研究として位置付けることである。本研究では、格助詞を手がかりとして文を理解する幼児の認知能力の発達により、文の表出において状況や場面に合わせた適切な格助詞の使用が可能になることの示唆を得ることを目的とする。

3. 研究の結果

（1）研究の経過

本研究では、格助詞を理解した上で、場所や状況に合わせて適切に格助詞を使用した文を表出すること、また、年齢に応じて適切な格助詞の使用の発達を明らかにし、幼児の格助詞獲得を捉えることを目的とし、①「文の理解課題」、②「即時模倣課題」、③「文の自発的表出課題」の 3 つの課題を作成し、すでに収集されたデータをもとに分析を進めた。

対象幼児　調査協力を得た都内の幼稚園にて、保護者の承諾が得られた園児 56 名（4 歳児：26 名、5 歳児 14 名、6 歳児 16 名）である。

調査課題　①「文の理解課題」では、幼児の前に図版を横 1 列に並べ、調査者によって提示文が読まれ、その文に合う図版を選ぶことを求めた。②「即時模倣課題」では、提示文について、「真似をしてください」と調査者が提示文を読み上げ、直後再生を求めた。③「文の自発的表出課題」では、図版を見せて、「これはどうしていますか」と聞いて答えさせた。目標となる格は聞かせないように注意し（例：「これはだれがどうしていますか」などは聞かない）、教示を行った。

調査時期・場所　調査を実施した時期は、2019 年 12 月～2020 年 1 月であった。課題を実施した場所は幼稚園の使用されていない教室であるが、幼児が保育時間中に使用している馴染みのある部屋であった。

倫理的配慮　本研究の実施にあたり、学内の研究倫理委員会承認を得た（受理番号 20190005）。調査の内容と目的、プライバシーの保護について書面と口頭にて説明をし、調査協力の承認を得られた幼稚園において、データ収集の承諾を得た。その後、保護者へ書面にて調査協力を依頼し、保護者が承諾書に署名することで同意を得たとした。

（2）結果

①「文の理解課題」

目的語が無生名詞の文において、正序文・倒置文のどちらも 5 歳児と 6 歳児はすべて正答が得られ、4 歳児においても高い正答率が得られた。目的語が有生名詞の正序文においては、5 歳児は 96.5%、6 歳児は 96.7%の正答が得られた。4 歳児の正答率は 80.8%であった。0 が有生名詞の倒置文の正答率は、4 歳児が 67.3%、5 歳児が 60.8%、6 歳児が 66.4%であり、すべての年齢群において、正答率が低かった（図 1）。

目的語が無生名詞の SVO 構文は語順に関わらず、名詞の理解が可能であれば文に合う図版の選択が可能な課題であり、どの年齢群においても高い正答率になったと考えられる。一方、目的語が有生名詞の SVO 構文においては、文に 2 つの有生名詞があることから、格助詞を文の理解の手がかりとする必要がある。幼児は始めに語順を手がかりとして文理解をする傾向があることから、正序文は、概ね高い正答率が得られたと考えられる。倒置文は、どの年齢においても正答率が下がっていることから、6 歳までの幼児が格助詞を手がかりとして文理解をすることは、まだ難しいといえる。

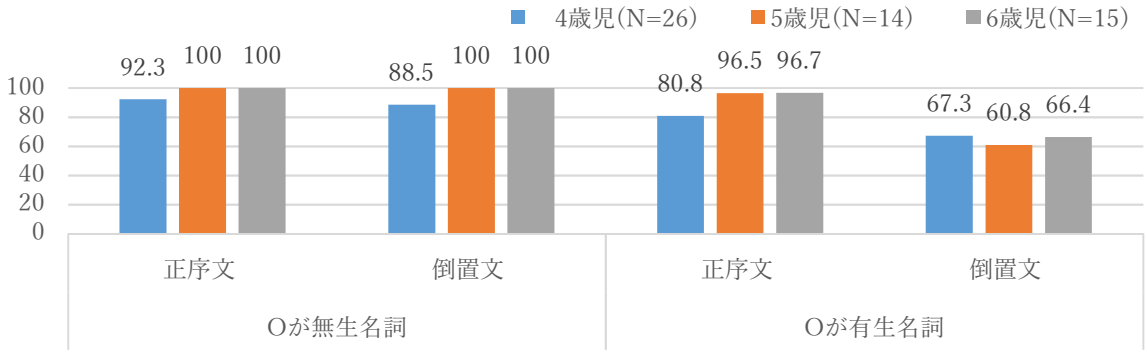

図1.「文の理解課題」の正答率

① 「即時模倣課題」

目的語が無生名詞の正序文の正答率（図 2）は、4 歳児が 84.6%で、5 歳児と 6 歳児は 100%と、高い正答率であった。目的語が無生名詞の倒置文は、4 歳児が 57.7%、5 歳児が 78.6%、6 歳児が 80.0%となっており、無生名詞の SVO 構文において正序文より倒置文が模倣は難しいことが示された。

目的語が有生名詞の正序文の正答率は、4 歳児が 65.4%、5 歳児が 78.6%、6 歳児が 96.3%であった。倒置文においては、4 歳児が 15.4%、5 歳児が 35.7%、6 歳児が 46.7%と非常に低くなっている。目的語が有生名詞の SVO 構文においては、文に 2 つの有生名詞があることから、混乱が生じやすいことが考えられる。さらに、「文の理解課題」においても正答率の低かった、目的語が有生名詞の倒置文の正答率は非常に低いことが明らかになった。

提示された文を模倣するという点において、「即時模倣課題」は自発的に文を構成するよりも容易な側面があると考えられるが、本研究においては、目的語が無生名詞の正序文以外の模倣で、「文の理解課題」の正答率が高くても模倣が難しい結果となった。「即時模倣課題」における幼児の再生反応をみていくと、目的語が無生・有生名詞に関わらず、「が・を」文のパターンで再生している傾向がうかがえ、幼児にとって、SVO 構文を教示された際に、「が・を」文で再生されやすいという特徴が示唆された。このことから、幼児は提示された文を単純に模倣するのではなく、自分の知っている統語パターンに置き換えて応答していることが推測された。

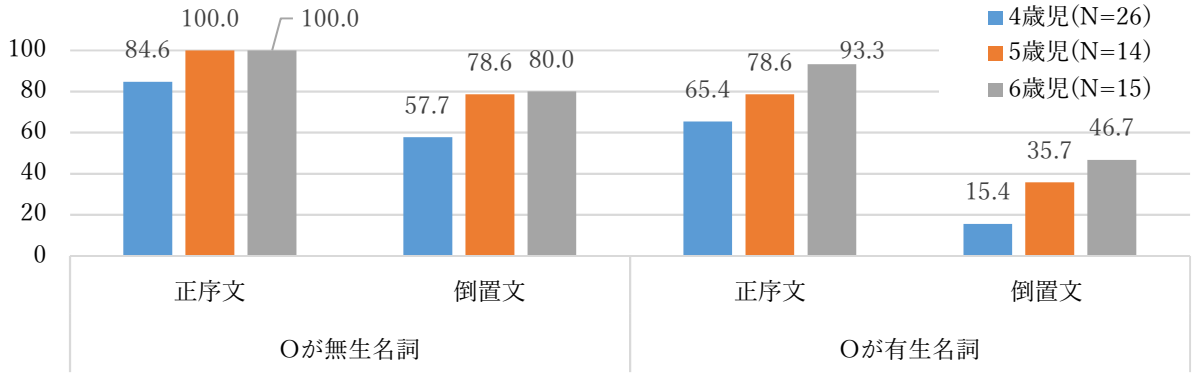

図2. 「即時模倣課題」の正答率

③「文の自発的表出課題」

格助詞の「が」と「を」を使用して文を表出している割合は、目的語が有生名詞の図版では、6 歳児は 97.5%、5 歳児は 80.0%、4 歳児は 54.6%の使用がみられた。目的語が無生名詞の図版については、6 歳児は格助詞を使用したすべての幼児（95.8）が「が」と「を」を使用しており、5 歳児は 83.3%、4 歳児は 56.4%の使用がみられた。

各年齢の格助詞「が」と「を」の使用の特徴についてそれぞれ割合を算出した結果(図 3)、4 歳児の特徴として、格助詞を使用した幼児のうち、「が」を使用している割合が最も多くなっており、行為者を示す agent-maker として格助詞が使用され始めていることが推測される。5 歳児においては、目的語が無生名詞の場合は「が」と「を」の両方の使用が最も多くみられ、次いで「が」の使用が多かった。目的語が有生名詞の場合は「が」の使用が最も多くみられ、次いで「が」と「を」の両方の使用が多いという特徴がみられた。この特徴は 6 歳児の格助詞の使用の特徴と類似した傾向であった。先行研究において、格助詞「を」は「が」より省略されやすい(伊藤、1996)ことが示されており、本研究においてもその特徴がみられた。しかし、5、6 歳児においては、格助詞「が」の使用の割合と「が」と「を」両方の使用の割合に大きな差はなく、文の種類による格助詞使用の違いがあることが考えられる。よって、動詞との結びつきによる格助詞の使用の特徴を検討する余地があるだろう。

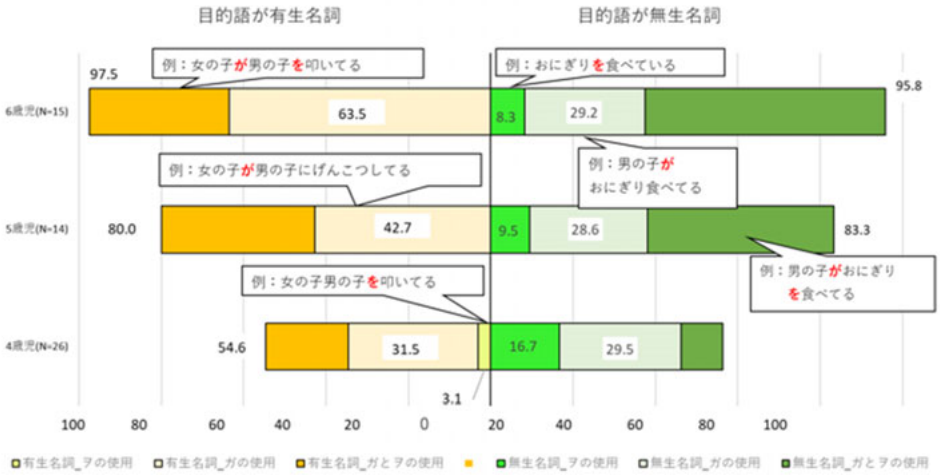

図３.「文の自発的表出課題」における格助詞「が」と「を」の使用率

④ SVO 構文の理解と表出

「文の理解課題」の正答率が 100%であった幼児 16 名の「即時模倣課題」と「文の自発的表出課題」の反応特徴を検討した(図 4)。

「即時模倣課題」も全文模倣ができた幼児は 37.5%であり、最も多い傾向は、目的語が有生名詞の倒置文の模倣のみ誤答（56.3%）であった。

「文の自発的表出課題」において、全文模倣ができた幼児の 50.0%が、格助詞「が」と「を」の両方を使用しており、SVO 構文の理解と表出のどちらも獲得していると考えられる。

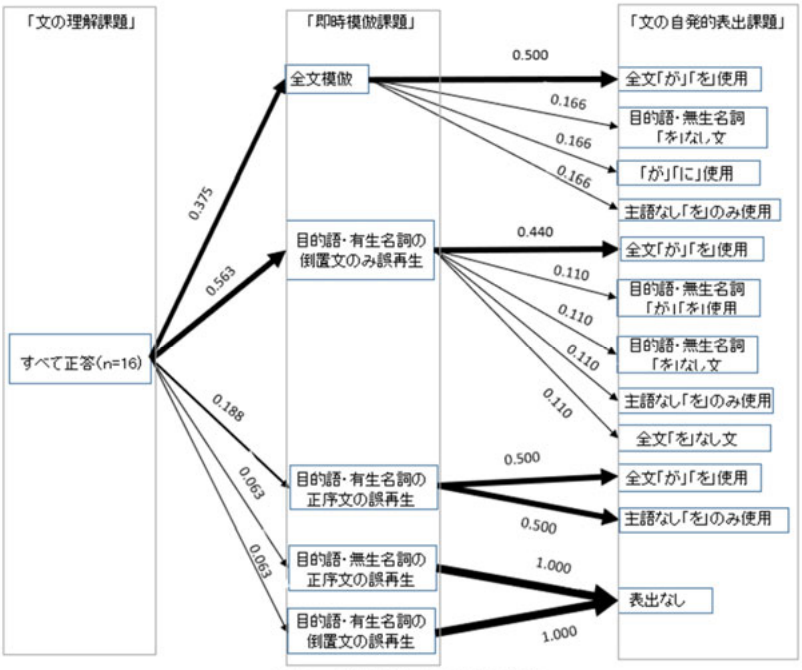

図４．SVO構文の理解と表出

また、目的語が有生名詞の倒置文の模倣のみ誤答であった幼児のうち、44.0%に「文の自発的表出課題」において、格助詞「が」と「を」の両方の使用が認められた。この課題においては、倒置文を用いることなく正序文で表出する傾向があり、「即時模倣課題」において倒置文の模倣が求められた際に格助詞を適切に使用するより、自発的に文を表出する際に格助詞を適切に使用することが容易である可能性が考えられた。

しかし、本研究はまだデータ数が十分ではなく、上記の特徴を明らかにするにあたり更なるデータの収集と分析を行うことが必要である。

4. 研究者としてのこれからの展望

本研究を引き続き継続し研究結果の知見を更に深め、言語発達についての研究を蓄積していくことによって、幼児の発達支援といった臨床実践にも還元していきたいと考えております。また、幼児の言語発達の面白さについて、学生や広く一般に伝えていきたいと思っております。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

この度は女性研究者奨励金を頂きまして心より感謝申し上げます。今回の奨励金をいただいたことで、モチベーションにつながり研究を途中で断念する事なく継続することができました。今後も、引き続き研究活動を途切れさせることなく精進したいと思っております。